

米国都市貧困研究における方法論の展開

——ウィリアム・J・ウィルソン『アメリカのアンダークラス』以降に着目して——

東京大学 大和冬樹

1 目的

米国における近年の都市貧困研究では、W.J.ウィルソンの1987年の著書『アメリカのアンダークラス』が極めて重要なターニングポイントであるとされている。ウィルソンは、インナーシティのゲットーにおける貧困の生成構造を描いたその著書の中で、貧困層の集中した地域環境は、そこに住まう人々の機会を制約し、貧困からの脱出を一層困難にすることを指摘。貧困を分析する際に地域が重要な変数であるとの説を提唱した。以降、米国における都市貧困研究では、ウィルソンのこの議論を引き継ぎ、貧困者が集中する地域に住まう事自体の効果の分析を試みる、近隣効果(Neighborhood Effects)研究という分野が隆盛する。近隣効果研究では、米国で蓄積されていた大規模パネルデータを元に、貧困に対する地域の効果の推定を試みる計量研究が多数なされてきた。一方で、そのような近隣効果研究に対しては方法論的批判も多い。代表的なものは、近年の近隣効果研究が、具体的に都市空間において効果が生じるメカニズムを説明しない、効果自体があるか無いかの二分法的問いとなっており、そのような傾向が研究プログラムの進展に悪影響を与えている(Sharkey and Faber 2014)というものである。

では、近隣効果研究におけるそのような問題はなぜ生じたのか？本発表では、米国におけるウィルソン以降の都市貧困研究の方法論的展開を整理することを通じ、近年の近隣効果研究群に研究プログラム上の問題が生じるに至った構造的理由を明らかにする。

2 方法

まず、近隣効果研究の着想のもとであるウィルソンの研究群が、都市貧困研究として、何を答えるべき問いと設定していたかを明らかにする。次に、ウィルソン以降に発展した近隣効果研究が、手法としてどのような特徴を持ち、ウィルソンの問いのうち、どの部分に答えどの部分に答え得なかったのかを確認する。

3 結果・結論

ウィルソンが1987年の著書で提示した説は、異なった手法を用いて解明すべき問いの複合体であった。ウィルソンは、社会構造と文化が互いに相互作用し、ゲットーの貧困の諸問題を生んでいったか、その総体的なメカニズムの追求を試みる方向へ研究を進めた。近隣効果研究は、統計学的因果推論に注力することで、ウィルソンが提示はしたが十分に検証できていなかった地域の効果の存在の証明に成功した。しかし、近隣効果研究がそこで答えたのはウィルソンが提示していた都市貧困研究の問いのごく一部であり、統計学的因果推論は他の問いに必ずしも適合的な手法ではなかった。今後の都市貧困研究の発展のためには、当初のウィルソンの構想で答えられていない問いを分析する必要がある。

文献

Sharkey, Patrick and Faber, Jacob W., 2014, "Where, When, Why, and For Whom Do Residential Contexts Matter? Moving Away from the Dichotomous Understanding of Neighborhood Effects," *Annual Review of Sociology*, 40(1): 559-579.

Wilson, William J., 1987, *The Truly Disadvantaged: The Inner City, the Underclass, and Public Policy*, Chicago: University of Chicago Press. (=青木秀男監訳, 1999, 『アメリカのアンダークラス 本当に不利な立場に置かれた人々』明石書店.)